

花と子ども 画家

いわさきちひろ

生誕100年

松本 猛 ⑮

黒柳徹子の自伝的小説「窓ぎわのトットちゃん」の表紙や挿絵にはちひろの絵が使われている。ちひろが生前に描いていたのかと聞かれることもあるが、実は黒柳と筆者が残された作品から選んだ。その縁もあり、黒柳が北安曇郡松川村の「安曇野ちひろ美術館」と、東京・練馬区の「ちひろ美術館・東京」の館長を務めている。

黒柳の親しい友人に99歳の著名な日本画家、堀文子がいる。テレビ番組「徹子の部屋」のセットには黒柳をモデルにした作品「アフガンの王女」が飾られ

同い年のライバル

互いの存在 大きな刺激に

ている。

実は、ちひろと堀は同い年で

戦後すぐからのライバルだった。家庭環境も似ており、学校

こそ違うが東京府立の女学校時代から絵を学んでいた。2人とも戦争中につらい経験をし、戦

後、民主化運動や平和運動に接近した。雑誌「働く婦人」では先に堀が表紙を担当し、遅れてちひろも描く。1950年代に入ると子ども向け月刊絵雑誌が

次々と刊行されるようになる。2人はこの世界でも競い合い、しばしば同じ絵雑誌に作品が掲載された。56年、ちひろは「ひかりのくに」に発表した作品などが評価され、小学館児童出版文化賞を受賞する。この賞を最後まで争ったのも堀だった。

掲載した2点は、2人が描いた福音館書店の月刊絵本「こどものとも」である。創刊号は堀、ちひろは12号だった。編集長の松居直は当時、フレッシュな画家として堀とちひろに注目して

いたと語るが、松居は堀を創刊号に選んだ。松居の友人で好敵手でもあり、後にちひろとの傑作絵本を何冊も生み出す至光社の編集長、武市八十雄もまた「こどものせかい」で毎月のように2人を起用していた。

ちひろにとつて、モダンな感覚で繊細な色調を自在に操る堀文子の存在は大きな刺激になっていたはずだ。

堀は、90歳を過ぎてから雑誌「芸術新潮」にこう語っている。

「あの方の場合は、この時代の戦争体験が作品の深みになっています。…哀しさや優しさがにじんんでいます」。そして、ちひろが描いた子どもの瞳にひそむ

涙は、激動の時代を生き抜いたちひろ自身の涙だ、という。

2人は親しく言葉を交わすことはなかったが、互いの存在がそれぞれの画業を高め合うことにつながったのだろう。

(美術評論家)

〈土曜日に掲載します〉



「ひとりてできるよ」(小林純一作/岩崎ちひろ画 福音館書店刊)



「ビップとちょうちょう」(与田準一作/堀文子画 福音館書店刊)